

八尾市指定文化財 安中新田会所跡 旧植田家住宅 ニュースレター

旧植田家だより

KYU-UEDAKE INFORMATION

NEWS LETTER

発行部数 3,000 部

Vol. 27

2016年1月発行

企画展

植田家の花鳥風月

八尾探&コンサート八尾の音楽家

八尾ミュージックフェス Vol.0

連載コラム

「落穂拾い - 今東光の薫風 - (二十一)」



<http://kyu-uedakejutaku.jp/>

展示のご案内

主催：NPO法人HICALI

なぞ **なぞ** 昔の道具

【謎レベル★★】

平成27年度 冬季企画展

2016年 **1月6日(水)～3月6日(日)**
(平成28年)

休館日：火曜日、1月13日(水)、2月12日(金)
【開館時間】午前9時～午後5時(ただし入館は午後4時30分まで)
【観覧料】一般200円、高校・大学100円、中学生以下は無料

汗まかけばかくほど
 背が低くなるのは誰?
 【謎レベル★★★】

上げ大水、
 下げ大火車、
 これなんなんだ?
 【謎レベル★★★】

【謎レベル★】

【謎レベル★★★】

【謎レベル★★★★★】

使ってみよう！昔の道具
連続講座「火の心」(全3回)
 1月～3月 第4日曜日 開催
※詳細は要綱をご覧ください

八尾市指定文化財
安中新田会所跡 旧植田家住宅
大阪府八尾市植松町1-1-25 <http://kyu-uedakejutaku.jp/>

平成27年度 冬季企画展

「なぞ、なぞ、昔の道具」

2016年1月6日(水)～3月6日(日)

こどもから大人まで楽しめる「なぞの道具」を展示しています。

※休館日は P15 をご覧ください

.....

Contents

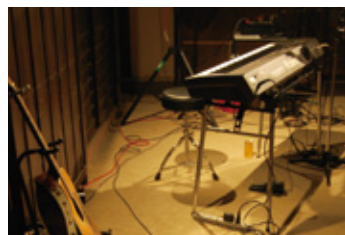
- 4 秋季企画展
植田家の花鳥風月
- 6 講座「大坂画壇と花鳥風月」
- 7 旧家で愉しむ食事会
- 8 八尾探&コンサート八尾の音楽家
八尾ミュージックフェスVol.0
- 10 研究の一と：ファイル10「盃」
- 11 三会所だより(7)
- 12 なにわの伝統野菜栽培日記 ㊿
- 13 植松灯籠の日
- 14 コラム「落穂拾い - 今東光の薫風 - (二十一)」
- 15 旧植田家住宅のご案内



表紙写真

《八尾探&コンサート八尾の音楽家》

八尾市指定文化財である旧植田家住宅を会場に例年開催している「コンサート 八尾の音楽家」。建物の魅力を伝えると共に、地域に縁のある音楽家による演奏を披露。今回は八尾市観光協会との共催でコンサートを行なった。詳細は 8 頁に掲載。



※『旧植田家住宅だより』のバックナンバーはホームページからダウンロードができます。
<http://kyu-uedakejutaku.jp>

2015年 秋季企画展

植田家の花鳥風月

— 大坂画壇Ⅲ —

2015年 秋季企画展
「植田家の花鳥風月〜大坂画壇Ⅲ〜」
かちようふうげつ

2015年度の秋季企画展では、これまでの企画展「植田家と大坂画壇」の第3弾として、旧植田家住宅所蔵の大坂画壇関連の掛軸を中心に展示を行いました。これまでとはすこし違い、今回「花鳥風月」というテーマを設け、自然の風景や風流を描いたものに焦点を当て、大坂画壇の流派や系統、その表現の違いに注目しました。また、植田家がこうした大坂画壇の一連の作品

を収集した背景や意味を窺い知る好材料として、改めて作品を鑑賞する機会となりました。

かつて植田家では、掛軸が専用の収納棚に収められ、「春夏秋冬」「祝・仏事」などに分類されていました。へ時とへ場に合わせて掛軸を飾り、季節や礼節を重んじていたことがわかります。この中には、四季を代表する花鳥画や山水図が多岐にわたり、大坂画壇の画家たちの作品が多く含まれています。また、その作品の質と量からは当主の文化的素養の高さや関心が想像でき、長年培われた植田家の「風流」が掛軸を通して伝わってきます。山水や花鳥風月という「自然の情景」が飾られた往時の座敷の風景は、植田家にとっては本物の自然以上に



春色自豊饒
壬子夏月字雲嶺

植田家





愛石《桃源春雲圖》



大坂画壇の一連の作品がずらりと並ぶ



「直入詩画茶碗」の展示



「画帖」の中身を公開



学芸員によるギャラリートークも開催

価値のあるものだったと思われれます。

さて、展示は江戸時代後期の鼎春嶽、田能村直入、岡田半江の山水図に始まり、明治期の矢野橋村、姫島竹外、さらに大正・昭和時代の赤松雲嶺、幸松春浦の山水図と花鳥画を各種時代ごとに並べ、その比較を行いました。また、画僧（絵を嗜む僧侶）の愛石が描く《桃源春雲図》は、池大雅風と称される特徴がよく表れ、作品の大きさにも驚かされます。

これらわずか14点の作品だけでも十分な見応えと比較ができますが、これらは本来、座敷の床の間に掛けられ、時や場に応じて鑑賞されてきたものです。こうして一堂に鑑賞されようとは当時の植田家の人々には想像できなかったことと思います。言い換えれば、本来の正しい鑑賞法ではないですが、企画展示ならではの良さがここにあります。

展示は、壁面の掛軸だけではなく、一冊の本に複数の作者の作品をまとめた「画帖」や、田能村直入が還暦の祝いものとして千個も作ったといわれる古曾部焼の「詩画茶碗」もあり、大坂画壇をまた違った角度から眺めることもできました。まだまだある旧植田家の書画類は今後も展示を通して公開していきます。

（学芸員 安藤亮）

おおさかがだん

かちょうふうげつ

「大坂画壇と花鳥風月」

江戸時代から昭和にかけて大坂(阪)を中心に活躍した「大坂画壇」に迫る。



跡見花蹤《桜図》



あけお けいぞう
講師：明尾圭造氏
(大阪商業大学商業史博物館 主席学芸員)

「今年、近年まれに見る、大坂画壇の展示が重なった珍しい年」だということで、確かに大阪府内では旧植田家住宅(八尾市)の企画展と大阪商業大学商業史博物館(東大阪市)では「北野恒富と中河内―知られざる大阪画壇の発信源―」、そして大阪歴史博物館(大阪市)でも特別展「唐画もん」が開催され、同じ時期に3つの大坂画壇関連の展示が開催されていました。「まだまだ集客力がない」という大坂画壇の展示が、今の大阪でこれだけ開催されていることの意味をのこしながら、本来の美術鑑賞のあり方や大坂画壇の現在と評価等について冒頭で語られ

ました。

企画展「植田家の花鳥風月」会期中の11月22日(日)、大阪商業大学商業史博物館学芸員の明尾圭造さんを講師に迎え、講座「大坂画壇と花鳥風月」を行いました。明尾さんには、2011年の大坂画壇の企画展でも講座に来ていただいております。今回4年ぶりに再びお話をさせていただきました。

本題の「四季の中で見る大坂画壇」のお話では、今回展示中の17作品について、作者の紹介とともに作品の特徴や見所を幅広い知識を交えて詳しく解説していただきました。目から鱗の話もたくさんあり、展示を担当した学芸員も講座終了後すぐに改めて展示室へ作品を鑑賞しに行きました。大坂画壇の作品の再評価もさることながら、本来美術鑑賞は「個人的な趣味趣向に沿うものである」とする明尾さんの言葉に、自分も含めて鑑賞者がかもつと作品を見る目を養う必要があることを実感しました。

後日、12月19日(土)には、本講座とも関連した大阪商業大学比較地域研究所との共催による研究会「関西における文化資源の活用」を旧植田家住宅で開催しました。大阪府立大学名誉教授の山中浩之先生のお話を聞くことができ、こうした取り組みを今後も増やしていきたいと思われました。

ました。

本題の「四季の中で見る大坂画壇」のお話では、今回展示中の17作品について、作者の紹介とともに作品の特徴や見所を幅広い知識を交えて詳しく解説していただきました。目から鱗の話もたくさんあり、展示を担当した学芸員も講座終了後すぐに改めて展示室へ作品を鑑賞しに行きました。大坂画壇の作品の再評価もさることながら、本来美術鑑賞は「個人的な趣味趣向に沿うものである」とする明尾さんの言葉に、自分も含めて鑑賞者がかもつと作品を見る目を養う必要があることを実感しました。



菅植彦《稻荷詣》

名品の数々

愉しみ方



植田家の食器
植田家のお膳

伝統的な古民家



かまどの大根飯(炊飯前)



座敷

一の膳



二の膳

なにわの伝統野菜

ギャラリートーク

いろいろ

旧家で愉しむ食事会

年に一度のちよつと贅沢なお楽しみイベント「旧家で愉しむ食事会」が、昨年12月5日(土)の閉館後に行われました。例年、旧植田家住宅と同じ八尾市植松町にある「創業庵ひろなお」さんに料理の提供を頂いていましたが、惜しむらくは9月に閉店されたため、今回は新たに植松町の旅館「山清荘」さんにご協力をお願いしました。

恒例の学芸員によるギャラリートーク(施設夜間見学)の後は、すこし早めの18時30分から食事会が始まりました。植田家で代々使用されてきた明治期の器に盛りつけられた「なにわの伝統野菜」を使った料理に、食事会では初めてのかまどで炊いた大根飯など、なじみのものから普段あまり味わうことのないものまで、これまた植田家で実際に使っていたお膳で運ばれてきます。料理の味はもちろん、新鮮な食材を使用し、煮炊き物などすこし懐かしい郷土食も出てきました。

参加者は、各々料理や食器、建物について会話をしながら食事を愉しみ、「一の膳」と「二の膳」の合間の学芸員の話にも耳を



食事会での賑わう座敷の風景

(旧植田家住宅スタッフ)

傾けていました。食器については、今回は特に関心を持っておられる方が多く、熱心に話を聴きながら、お隣同士で一点ずつ柄や種類の違う食器を見せ合ったり並べたりと、いろいろな愉しみ方をされていました。

今回かまどで炊いた大根飯は、なにわの伝統野菜の田辺大根と金時人参を使用しましたが、実は今回に先がけ、地元永畑幼稚園さんの見学でも練習を兼ねて、事前に炊く機会がありました。その甲斐あって、おかわりをする人もおられたり、抜群の炊き上がりでした。炊飯を担当するスタッフ(栽培日記でお馴染みI氏)はかなりのプレッシャーだったと思われます。

いつもと違う空間と雰囲気、さまざまに愉しみを味わうことのできるこの食事会に、ぜひまたご参加ください。



八尾ミュージック フェスティバル

Yao
Music
Festival
Vol.0



八尾探&コンサート八尾の音楽家 「八尾ミュージックフェスティバルVol.0」

旧植田家住宅が一般公開されてから早七年が経ちます。開館当初より毎年開催し、多くの方が心待ちにする「コンサート八尾の音楽家」は、八尾に縁のある音楽家を招き、この歴史ある建物を舞台に、音楽の楽しさや八尾の歴史・文化、建物の魅力を伝えることを目的に実施しています。いつもは年齢層が比較的高いこのイベントも、今回は若い世代の人たちをターゲットに、八尾市観光協会との共催で「八尾探&コンサート八尾の音楽家」として行いました。

ちなみに「八尾探」とは、八尾市が策定する『八尾市観光振興プラン』において八尾市観光協会を中心に、市民・事業者・NPO法人等と行政が連携して「八尾のまちの楽しみを探る」ためのプログラム（基本理念）で、同イベントと趣旨を同じくして、今回のコンサートが実現することとなりました。また「八尾ミュージックフェスティバルVol.0」のタイトルには、八尾市の音楽文化の向上のスタート地点や今後の展開への期待が込められてあります。八尾市の文化財である旧植田家住宅が、今も昔も変わらず文化の拠点になればと思います。

研究のーと



酒を注ぐと鯉が水面から跳ねているように見える

ファイル10 さかずき 「盃」

旧植田家住宅 学芸員
谷口 弘美



料亭「山徳」
の名入り盃



展示中の盃

今回は旧植田家の収蔵品から酒器の中でも古くから人びとの親交を深める上で重要な役割を果たしてきた「盃」をとりあげる。旧植田家に伝わる盃は五〜一〇個の揃いの盃、制作者の名が入ったもの、京都や九谷といった各地の窯元の一点ものなどがある。また、白磁、染付、色絵のものなど種類も多岐にわたり、特に趣向を凝らした盃もある。例えば、鯉の絵が描かれた盃は酒を注ぐと、鯉がまるで水面から跳ねているように見え、粋な演出になっている(写真)。これらの盃は日常生活をはじめ、

年末年始は忘年会や新年会などで、何かとお酒を飲む機会が多かったのではないだろうか。職場の同僚、友人たちと一緒に楽しくお酒を飲み、親睦が深まった(?)と思うが…。

そもそも酒は日本では古くから祭事ときの神への供物としてつくられたものだった。その神事後、参列者が神との饗宴や神の力を分け与えてもらうという祈願を込めてひとつの盃で順に飲み交わし、神と人、人と人との結びつきを強めた。その後、室町時代に醸造業が発展し、江戸時代には一般に飲酒の習慣が広がる。酒はより身近なものとなる。酒器も盃、徳利、猪口、ぐい飲みなどが使われるようになった。

冠婚葬祭や宴会などあらゆる場面で使われたと思われ、その度ごとに話題に上ったかもしれない。

旧植田家に伝わる盃の中でも数多く残されているのが記念盃で、軍の兵隊が除隊記念として知人達に配った名前入りの盃や警察の式典で進呈された盃の他、温泉、料亭、商店の名前入りの盃などがある(写真)。そうした盃の中でも農作物の品評会の記念盃、八尾の料亭「山徳」をはじめ関西一円の料亭の名前入り盃、大和川の樋門の完成記念の盃など、地元に関わるものが多いのも特徴である。これらの盃は明治から昭和初期にかけてのものがほとんどで、ほぼ未使用の状態で箱に収納されていた。植田家の人びとが美術工芸品や他の生活道具と同じく、盃も大切に保管していたことがわかる。

こうした植田家所蔵のおびただしい数の盃は植田家の人びとの活動範囲の広さを示してくれるものであると共に、当時の植田家の人びとをよく知る証人ともいえるかもしれない。

なお盃は、土蔵一・民具展示室にて常設展示している(写真)。

三会所だより (7)

鴻池新田会所の野鳥事情

住宅地と産業用地が複雑に入り組み、農地が点在して残る鴻池新田周辺で、会所の木立や草地は、野鳥にいくらかのまとまった活動空間を提供しているようです。さほど豊かではありませんが、二〇種あまりの野鳥をこれまでに視認しました。冬・春にそのほとんどを観察できます。

サギ類(アオサギ、ダイサギ、チュウサギ)はここを広い活動範囲の一部にしており、数日に一度くらいの頻度で出現します。カワセミは年に五、六度見かけます。カルガモは庭園の弁天池にごくまれに訪れますが、猫を警戒して長居はしません。モズとジョウビタキは晩秋から春先にかけて縄張りをつくって巡回しています。冬の間、メジロがサザンカの多い生垣に群がって移動しています。その群れに追隨する二、三羽のシジュウカラが見られます。

ツグミ、イカル、カワラヒワは冬から春にかけて季節移動の途上ではばらくとどまっています。最近をよくあることらしいですが、イソ

ヒヨドリが初夏の営巣期だけ、隣接する高いビルの通気口などに巣をかまえ会所の敷地をなわばりにします。冬の間、大群になり庭園のカシの繁みをねぐらにしていたムクドリは分散し、初夏に建物の軒から野地の下にもぐり込み営巣のするものがあります。蔵のそばで青い卵を拾うこともあります。会所に隣接する鴻池家朝日社の木立は高木が多く樹冠が鬱蒼^{うっそう}としているためか、ふつう山で見るシロハラがおり、モズもここで営巣しているようです。

キジバト、セグロセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、スズメ、ハシブトガラス、ハシボソガラスなどおなじみの鳥もにぎやかです。農地がひろがっていた三〇年ほど前には、ケリやヒバリが喧しいくらいでしたが、今は声を聞きません。

鴻池新田会所におこしください、手ぶらで気軽なバードウォッチングをお楽しみください。不運にも野鳥に出会えなければ、恒例の鴻池家寄贈民具展「むかしの道具いろいろ」(二月二十八日まで)をご覧ください。江戸時代末期から昭和時代初期までの資料を乾蔵で展示しております。

(鴻池新田会所 松田順一郎)

- 図1 いたって粗末なキジバトの巣。育すと卵も放棄し、戻ってこない (2012年11月25日)
- 図2 メジロの仲間に置き去りにされて生垣の中をさまようシジュウカラ (2015年12月26日)
- 図3 ムクドリの大群 (2015年2月22日)
- 図4 珍客カワラヒワ (2010年4月25日)
- 図5 なわばりに侵入したムクドリを蹴散らし、興奮状態のイソヒヨドリ(♀) (2015年5月13日)
- 図6 梅雨の晴れ間、弁天池のほとりにたたくカワセミ (2015年6月30日)



鴻池新田会所

場 所：東大阪市鴻池元町2-30
 交 通：JR学研都市線「鴻池新田」駅下車、南東に徒歩5分
 開 館：10時～16時
 休館日：月曜日、祝日の翌日(土・日除く)
 入館料：大人300円、小・中学生200円
 問合せ：06-6745-6409(電話)
 06-6744-7498(FAX)

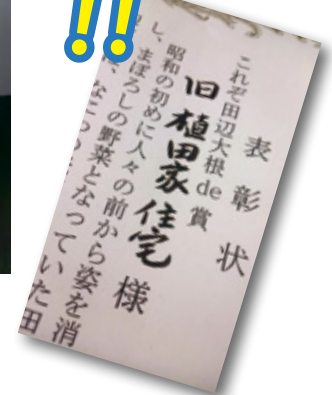


2度目の

バンザイ！



ドツカ〜ンと
やっちやいました!!



「これぞ田辺大根de賞」を受賞した
旧植田家住宅の大根 =2015年12月13日(日)

【三度目も狙います】

昨年12月13日(日)、大阪市東住吉区で開催された「第19回田辺大根フェスタ」において、旧植田家住宅で育てた田辺大根が、二度目の「これぞ田辺大根de賞」を受賞。これについて畑担当は「神様、仏様、

釜神様、そしてお世話になったみなさま、本当にありがとうございました。早速ですが、三度目も狙います！」と喜びと意気込みを語った。

※今回は出陳数が多く焦りましたが、永畑幼稚園さんも『かわいいde賞』を頂きました。

11・7 植松灯籠の日(夜間開館)を開催!

2014年5月から、年に2回行なっている「植松灯籠の日(夜間開館)」は、今回で4回目の開催となりました。灯籠についての詳しい説明は『植田家だより21号』をご覧いただくとし、今回も同イベントにはたくさんの方の来場者が見えました。

前回の「灯籠の日」では、庭の灯籠のライトアップに加え、江戸の浮世絵師・歌川国芳の影絵シリーズをパネル化し、主屋2階の窓に影を映し出す試みをしましたが、今回も同じく影絵を実施。歌川広重の「即興かげぼしづくし」シリーズから10点のパネルを2階の窓に投影しました。

外(庭)からみると、それぞれ「(橋の)欄干(らんかん)」「止まり木に鷹(たか)」「鉢植えの福寿草」「石

灯籠」「松」「鶴(つる)」「兔(うさぎ)」「岩に雁(かり)」「梅に鶯(うぐいす)」「猫」の影ですが、中からみると全て「人間」という大変ユニークな広重の作品。かなり複雑なポーズもあり、実際に人間がやってみるには難しそうですが(不可能ではない!?)、こうした発想が江戸時代に成され、それが浮世絵として描かれ現代まで伝えられていることに驚かされます(※この作品は旧植田家住宅の收藏品にはありません)。また、実際にパネル化して再現してみると、影と実像がかなり細密に表現されていることもわかりました。

来場者の皆さんは、夜間の旧植田家住宅を思い思いに楽しんでいる様子で、ゆったりとした時間を過ごすことができました。

(学芸員 安藤亮)

マンジーくん 安富士 暁



中からみると「人」「人」「人」…



庭からみた二階の影絵。

左から「欄干擬宝珠」「鷹」「鉢植え」「石灯籠」「松」「鶴」「兔」「雁」「鶯」「猫」

落穂拾い

I 今東光の董風 I (二十一)

文・伊東健

大英博物館で開催されて大好評を博し、昨年日本で初めて東京の永青文庫で本格展示された「春画展」が、今年二月六日より京都の細見美術館に巡回されるといふ、うれしいニュースに接すると、東光が書いていた数々の関連した文章を思い出します。

春画とは、浮世絵の中でも特に性的な事柄を核にした作品のことですが、大名から庶民まで様々な用途で愛用されました。しかしながら、江戸時代にはそもそも非合法の出版物でもあったこと、その図柄やテーマ等が、俗の極みだということ、表向きには評価が低いものでした。隠して、秘蔵するべき「笑い絵」とも呼ばれ、正統に論じられることは稀でした。

ようやく最近になって、十八歳未満は入場制限があるというものの、大規模な展覧会で、公に鑑賞できる機会が巡ってきたのを知ったら、東光は「遅いよ」と呟くかもしれません。

春画への理解と造詣が深かった東光は、当時でも珍しいくらい春画の高い芸術性に言及した数多くの文章を発表しています。特に、葛飾北斎が描いた春画をテーマに短編小説として仕上げたのが、『北斎秘画』です。この作品中で東光は、今回の「春画展」でも展示されていた北斎の「喜能会之故真通」に言及しています。

さらに「喜能会之故真通」半紙本三通の中の海女と蛸との交悦図に至って感極まりなかった。そうしてこの五十三歳以降から絶対に女人を近づけなかつた聖僧のような北斎が、いかに世に生ける人間を愛していたかということを理解した。(中略)

北斎の秘画が浮世絵史上の一大産物であり、したがって言うまでもなくたいがい稀な傑作だということ、当時の多くの秘画は美的感覚を逸脱して極めて煽情的であり、毒々しいほど猥雑なものにくらべて、ほとんど淡彩で処理している点がまず素晴らしいのだ。

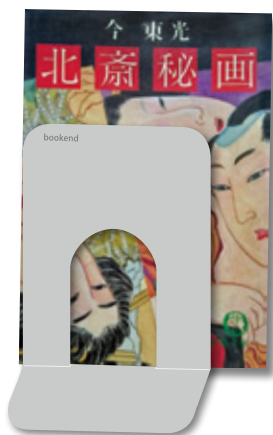
そればかりではない。彼の描いた男女の表情は、極めて写実的であったために真に迫るものがあり、その画面からあたりをはばからぬ娼声さえ洩れてくる感じがするのだ。徹頭徹尾その

描写が写実的だと余情というものが感ぜられないのに、あの北斎の特徴である女の着物のギザギザと縮れた不思議な描線が、彼の秘画をこの世のものでない美的な世界に誘導してゆくのだ。(後略)

『北斎秘画』(昭和六十一(一九八〇年)四月十五日 徳間書店発行より)

この小説で東光が残したメッセージは、今こそ読まれるべき「浮世絵論」であると同時に、東光自身が創作するうえで秘めていた真情を北斎に重ねているようにも思います。

ぜひ、極上の解説を片手に、大人の美術鑑賞をお楽しみください。



『北斎秘画』(昭和61.4.15 徳間書店発行)

【2016年2月～4月】

旧植田家住宅のご案内

今後の展示・企画

※毎月第1土曜日は「河内木綿体験(5名限定)」

// 第3日曜日は「むかし遊びの日」を開催

展示

2016年

◎1月6日(水)～3月6日(日)

企画展「なぞなぞ昔の道具」

※2/11(祝) ギャラリートーク(学芸員による展示解説)

◎3月10日(木)～4月24日(日)

通常展「大和川付け替え関連」

展示、イベント等のお知らせは
ホームページもご覧ください
<http://kyu-uedakejutaku.jp/>

企画

(詳しくはお問い合わせください)

◎2月

7日(日) 旧家で楽しむ落語会

28日(日) 連続講座「火②～火のあるくらしとアイデア～」講師:施設学芸員

◎3月

13日(日) 講座「中基兵衛と大和川付け替え」

講師:安村俊史氏(柏原市立歴史資料館 館長)

27日(日) 連続講座「火③～昔の灯りを知ろう～」

講師:別所由加氏(株式会社WINGED WHEEL)

◎4月以降は未定

随時ホームページ等で掲載予定



休館日カレンダー

■ = 休館日

□ = イベント開催日

2 February

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29					

3 March

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

◎4月以降の休館日は
直接お問い合わせいただくか
ホームページをご覧ください。
(2月下旬 掲載予定)

●開館時間:午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

●休館日:火曜日・祝日の翌日・年末年始
(詳しくは休館日カレンダーをご覧ください)

●入館料:一般200円(団体20人以上で100円)
高校・大学生100円(団体50円)
※中学生以下、身体障がい者手帳等の所持者
および介助者は無料

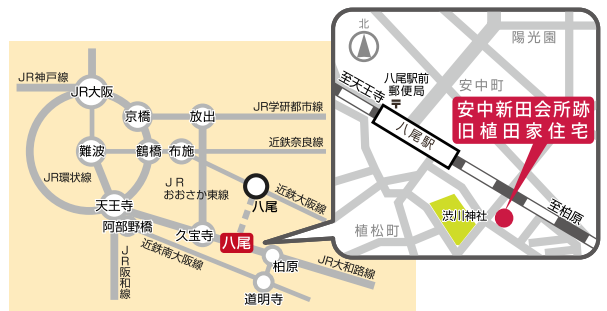
●お問い合わせ

〒581-0084 大阪府八尾市植松町1-1-25

TEL/FAX:072-992-5311

E-mail:info@kyu-uedakejutaku.jp

※当施設には駐車場はありません。車での来館はご遠慮ください。



◇JR大和路線「八尾」駅下車、南出口より東へ徒歩約3分

◇近鉄大阪線「八尾」駅から近鉄バス藤井寺駅前

JR八尾駅前バス停下車、南東へ徒歩約5分



シーズクリエイトは「印刷事業」と「地域活性の仕組作り」を通じて、物心豊かな“明日”をつくります。



事例 : no. 014
ハッピーアースデイ大阪 2016

環境のことを考え、日々の暮らしの中で幸せを感じることをテーマとした環境ムーブメント「アースデイ」。雑貨や食品等を販売するお店が約100店舗集まるマーケットや、体験型ワークショップ、環境に関する展示、学生団体の活動報告など、さまざまなコンテンツが会場を盛り上げます。

NEWS 次回のハッピーアースデイ大阪は、3月19日・20日の2日間、久宝寺緑地 修景広場にて開催！
 <http://www.happy-earthday-osaka.jp/>



私たちと、八尾の街。

八尾で味わえる絶品アジアスイーツ！

山本にある「茶米古道カフェ」を運営されている竹本さんにお話を聞きました。

「茶米古道(ちまきどう)の名前の由来は、アジアの基本調味料『茶米油塩醤酢糖』と、交易路という意味の『茶馬古道』をもじったもの。国や地域の食文化にも通じる『味の基本』を大切にしながら、アジアとの交易路のような役割を果たしたいという思いが込められています。

発売以来、好評をいただいているココナッツタルトは、マレーシアのペナン島にある世界一美味しいと言われていたお店に弟子入りし、門外不出だったレシピを受け継いだものです。原材料にも、化学調味料や保存料を使用しておらず、お子さまからご年配の方まで、美味しく安心して食べていただけます。

また、2014年に発売した『カヤジャム』も、たいへん好評いただいています。カヤジャムは、ココナッツミルクと卵、砂糖、パندانリーフ(パノラに似た甘い香りのするハーブ)を煮詰めて作るジャムです。トーストに塗る「カヤトースト」が有名で、シンガポール、マレーシアなどココナッツがとれる地域のカフェや家庭では、日常的に食べられています。

最近では、もっとココナッツの魅力に触れて欲しいという思いから、様々なイベントにも出店しています。そこで、ココナッツ削りのワークショップを体験してもらったりしています。

これからも、日本では知られていないアジアのスイーツの魅力を発信していきたいと思えます。そんな大人気のココナッツタルトやカヤジャムが、便利なオンラインショップでも購入できます。本場の味を、ぜひ味わってみてください。(オンラインショップ: www.rakuten.co.jp/chamikodo)



茶米古道
 竹本 清香さん
 茶米古道 HP
www.chamikodo.com

旧植田家だより Vol.27
 KYU-UEDAKE INFORMATION
 安中新田会所跡 旧植田家住宅だより 発行・編集 / NPO 法人 HICAU (安中新田会所跡 旧植田家住宅指定管理者)
 〒581-0084 大阪府八尾市植松町1-1-25 TEL.072-992-5311
 ホームページ <http://kyu-uedakejutraku.jp> メールアドレス info@kyu-uedakejutraku.jp
 ●本誌掲載の記事・写真・イラスト等の無断複写、転載を禁じます。